Report

調査報告

# エローラ石窟、敦煌石窟をたずねて
## ―二〇一九年の調査から―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　吉田　一彦

### はじめに

仏法（仏教）はしばしば神信仰と融合して発展してきた。仏法は、歴史的には原始仏教、部派仏教から大乗仏教、密教へと展開したが、そこには神信仰との融合の進展という側面が見られる。仏法はまた、アジアの広い地域に流布し、その中で地域の種々の神信仰と複合、融合を遂げてきた。日本における仏法と神信仰の複合、融合のあり方を、アジア諸国に見られる神仏の複合、融合のあり方と比較してその特質を明らかにすることは、重要な研究課題だと考える。私たちは、現在、日本学術振興会科学研究費の補助を受けた共同研究「神仏融合から見た日本の宗教・思想とアジアの比較研究―分野横断による人文学の再生―」（基盤研究（A）、研究代表者吉田一彦、二〇一七～二〇二一年度）に取り組んでいる。二〇一九年は、共同研究チームによって、三月にインド、九月に中国甘粛省敦煌市の調査を実施した。ここに調査の概要を覚書として記述しておきたい。

### インドの調査

二〇一九年三月九日～一七日にインドの調査を実施した。参加者は、吉田一彦、曾根正人、上島享、関山麻衣子、高井龍、高志緑、高橋早紀子で、高井と高橋は公務の関係で一三日の便で一四日に帰国した。調査対象地は次の通りである。

二〇一九年三月
九日　日本からデリーへ
一〇日　クトゥブ・コンプレックス、フマユーン廟、国立デリー博物館、オーランガバードへ移動
一一日　エローラ石窟のジャイナ教窟とヒンドゥー教窟の半数
一二日　アジャンター石窟
一三日　エローラ石窟の仏教窟とヒンドゥー教窟の半数、ムンバイへ移動
一四日　エレファンタ石窟、チャトラパティ・シヴァジ・マハラジ・ヴァストゥ・サントラバヤ
一五日　サーンチー仏塔、デリーへ移動
一六日　デリーのディガンバラ・ジャイン・ラール寺院（ジャイナ教）、ラクシュミー・ナラヤン寺院（ヒンドゥー教）、マハボディ寺院（仏教）
一七日　帰国

今回の調査では、エローラ石窟、アジャンター石窟、エレファンタ石窟、サーンチー仏塔などを実見、踏査することができ、大変充実した密度の濃いものとなった。ここでは紙幅の関係からエローラ石窟の神仏融合に焦点を絞って言及したい。

### 仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の複合窟

インドのマハーラーシュトラ州のオーランガバード郊外にあるエローラ石窟は、世界的に著名な、仏教とヒンドゥー教とジャイナ教の複合石

窟寺院群である。ここには合計三四もの石窟があり、第一～第一二は仏教の石窟（五～八世紀の成立という）、第一三～第二九はヒンドゥー教の石窟（七～九世紀の成立という）、第三〇～第三四はジャイナ教の石窟（九～一〇世紀の成立という）である。エローラ石窟の現在の入り口を入ると、正面に巨大な第一六窟が見えてくる。ここはヒンドゥー教のカイラーサナータ寺院である。またここの第二層にはランケーシュワラ寺院がある。ところ狭しと並ぶ数多くの石刻、彫刻は美術的に素晴らしいものであり、またあつい信仰心がうかがわれる。ここには、複数の信仰の複合、融合、重層が見られ、大変興味深い。

## エローラ石窟の仏教窟のマハーマーユーリー

最初にエローラ石窟のマハーマーユーリー（孔雀王、孔雀明王）像について触れたい。エローラにマハーマーユーリー像が造型されていることはよく知られている［森雅秀二〇一七］。それが仏教窟の中にまつられていることが興味深い。その一つは、第六窟の祠堂前向かって右側の壁で、ここの龕の中央に女神の立像が浮彫で造形されている。これがマハーマーユーリー像である。これは豊かな乳房と臀部を造型する女神の像であり、右手は一部破損しているが、孔雀の羽を持って上部に掲げており、左手は下に下げて果実を持っている。その周囲には関係の図像がレリーフで描かれており、向かって左側中段には羽を広げた孔雀の姿が描かれている［写真1］。

写真1　エローラ石窟第6窟
マハーマーユーリ像

もう一つは、第八窟の祠堂向かって右側の壁で、ここの龕の中央にやはり女神の立像の浮彫があり、マハーマーユーリー像である。その周囲には関係の図像が浮彫で描かれており、向かって左側中段には孔雀の姿が見える。私たちは、孔雀王（孔雀明王）信仰の展開に関心があるので［野口・吉田・上島・増記二〇一八］、これらの像を実見することができ、多くの知見を得ることができた。インドでは、マハーマーユーリー像は孔雀に乗る形態ではなく、女神の立像などの形態で描かれていた。

## エローラ石窟第一一窟、第一二窟の神仏融合

次に、仏教窟の中に見える神や魔について触れたい。第一一窟、第一二窟は巨大な仏教の僧院で、七～八世紀のものと推定されている。どちらも三層構造になっている。

まず、第一二窟の第三層には、奥の祠堂に、中尊として結跏趺坐して降魔印（悪魔降伏の印相）の姿をとるシャカ像、その左右に八躯の菩薩立像がまつられる。入口を入って左右の正面に対面する壁には、ブッダに対面するようにして神像がまつられている。正面向かって左側の壁は上部がターラー像で、下部は仏菩薩像であろう。右側の壁はジャンバラ像と思われる。シャカが坐す台座の下部の左右には上部を手で支えるようにするガナが描かれている。床面

写真2　エロラ石窟第12窟
第三層祠堂　ビナヤカを組み伏すアパラージター

を見ると、台座に接するようにして、ビナヤカらしきものを組み伏すアパラージターの小像がある［写真2］。また向かって左には地天らしき像（頭部欠く）がある。なお、この祠堂内には天井等に壁画があり、彩色が美しく残っている。このように、シャカの降魔の場面に、仏や菩薩とあわせて魔や地天、あるいは神が描かれているのは大変興味深い。

同じ第一二窟の第二層の奥の祠堂もこれと類似しており、正面中央にシャカの坐像がまつられ、結跏趺坐して降魔印をとっている。その左右には菩薩立像が立ち並び、それには一部彩色が残っていて、美しい。入口入って正面に対面する左側の壁にはターラーらしきもの、右側の壁にはジャンバラらしきものが描かれる。第一一窟はどうだろうか。第一一窟の第二層は正面に三つの祠堂がある（四つ目のものが向かって右にあるが中は空洞になっていた）。その一つには、正面中央にシャカの坐像がまつられ、結跏趺坐して降魔印をとっている［写真3］。台座の下部には上方を支えるガナが左右に描かれ、台座の前の床面には向かって左に壺を持つ地天、右にガネーシャを踏みつけるアパラージターの小像がある［写真4、5］。これは、シャカが人差し指を地につけると、地の神がシャカに加勢して魔を撃退したという降魔の説話の場面を描いていると解釈されるから、ここのガネーシャは魔として登場しており、それが地天に撃退される場面が描かれている。ここの造形は、インドの「鬼神を制するは鬼神」の思想によるものと思われる。なお、この祠堂には入り口を入って正面に対面する右側の壁にジャンバラが描かれている［写真6］。

写真3　エローラ石窟第11窟第二層祠堂　シャカ坐像

写真4　エローラ石窟第11窟第二層祠堂　シャカ坐像台座

写真5　ガネーシャを踏みつけるアパラージター

写真6　エローラ石窟第11窟第二層祠堂　ジャンバラ像

第一一窟の第三層には三つの祠堂（ただし向かって右は中は空洞）がある。その内、中央の祠堂には、中尊としてシャカの坐像が造型される

ことは同様であるが、向かって右側の壁に浮彫で魔のようなものが描かれている。これらはドゥルガー、ガネーシャ、カーラーであろう。

このように、第一一窟、第一二窟には、祠堂の正面にシャカの坐像、その左右に菩薩たちの彫刻が安置されるが、あわせて入り口左右の正面に対面する壁に、ブッダに対面するようにして神像が浮彫で描かれている場合が多く、大変興味深い。森雅秀氏は、これについて第一一窟の第二層の向かって右側のものと、第一二窟の第三層のものと、第一二窟の第二層のものをジャンバラとターラー？とし、第一二窟の第一層をターラーとチュンダーと比定している［森雅秀二〇〇七］。

## 敦煌の石窟の調査

二〇一九年は続いて九月九日～一七日に中国甘粛省敦煌市の石窟寺院の調査をすることができた。参加者は、吉田一彦、曾根正人、伊藤聡、荒見泰史、荒見愛、関山麻衣子、高橋早紀子、高志緑、高井龍（一二日の便で一三日帰国）、平法子（一三日より参加）、白川梨香（一三日より参加）、上島享（一四日より参加）である。調査対象地および拝観窟は次の通りである。

二〇一九年九月

九日　日本から敦煌へ

一〇日　敦煌博物館、西晋墓・東漢墓、鳴沙山

一一日　莫高窟の第六一、九五（非公開窟、研究用拝観）、九七（非公開窟、研究用拝観）、二〇五、一五四窟

一二日　莫高窟の第三八四、三三五、三三六、三三七、二二〇、二七五、天王堂（非公開堂、研究用拝観）、敦煌研究院副所長李国先生らと学術交流

一三日　玉門関、西千仏洞の第四、五、一〇、一八窟、学会（中華炎黄文化研究会童蒙文化委員会）会長の金滢坤首都師範大学教授らと学術交流

一四日　莫高窟の陳列館、第一六～一七、三三二、四二八、四二〇、二五九、一四八、一七一、六一（再見）窟

一五日　莫高窟の紹介映画鑑賞、午前に学会（中華炎黄文化研究会童蒙文化委員会第五届国際学術研討会）の莫高窟現地調査に参加、午後に莫高窟特別窟などを調査。

莫高窟の第四六、四五（学会見学）、三二一（学会見学）、五七、二四九、九六、一〇三、一〇五、一六九（非公開窟、研究用拝観）、一五八、九窟

一六日　楡林窟の第二、三、四、二五、一二、一四、一三、一七、一六、二六、二七窟

一七日　帰国

敦煌では、同行の荒見泰史氏が一四日に学会（「中華炎黄文化研究会童蒙文化委員会　第五届国際学術研討会」）の基調報告を行なった。また、荒見氏の紹介により、同学会会長の金滢坤首都師範大学教授らと学術交流することができ、多くの知見を得ることができた。また、一五日には同学会の調査に参加し、莫高窟の特別窟を見学することができた。さらに一六日には、金滢坤先生らとともに楡林窟を調査することができた。同学会および金滢坤先生に心より御礼申し上げる次第である。

また、一三日には、荒見氏の紹介により、敦煌研究院を訪れ、副所長の李国先生らと学術交流することができ、多くの知見を得ることができた。また、研究のためいくつかの非公開窟および天王堂［写真7］の見学を御許可いただいた。李国先生お

よび敦煌研究院に心より御礼申し上げる次第である。

写真７　敦煌莫高窟　天王堂

## 莫高窟の孔雀明王像

莫高窟でも孔雀明王像を実見することができた。一つは第二〇五窟のものである。この窟には、前室の頂に不空羂索観音、千手観音、如意輪観音の壁画が描かれ、甬道の天井に孔雀明王像の絵画が描かれている。これは、台座に乗り羽を広げる孔雀に乗る孔雀明王を描く絵画で、四臂で、孔雀の羽、蓮華、菓、蓮華を持っている。また頭部には化仏が描かれている。五代の時代のものだという。

もう一つは第一六九窟のもので、ここも甬道の天井に孔雀明王像の絵画が描かれている。こちらは蓮華の台座に乗り羽を広げる孔雀に乗る孔雀明王を描くもので、二臂で、右手に宝珠、左手に孔雀の羽を持っている。下部には左右に童子が描かれている。敦煌の孔雀明王像については橋村愛子氏の研究がある［橋村愛子二〇一一］。

## 敦煌の夜叉たち

敦煌では夜叉の壁画を多数実見することができ、多くの知見を得ることができた。私は日本における鬼神観念の形成と発展に関心を持っている。それは長い時間軸の中で種々の文化交流によって形成、発展してきたものであるが、中国の鬼神観念とあわせてインドの鬼神観念の強い影響を受けていると考えている。特に、その視覚イメージは、インドの鬼のイメージを密教の造形を通じて受容したものが基調になっていると考えられる。その重要な要素の一つが夜叉の視覚イメージである。

莫高窟では、第三八四窟で夜叉像（壁画）を実見することができた。同窟の東壁の門口北側に描かれる毘沙門天像の左右には、毘沙門天に侍す二人の夜叉像（壁画）が描かれている。このうち向かって右の夜叉は、赤色、二眼で、髪の毛を逆立たせ、裸形で豹柄のパンツの上に赤褌をはき、両手で一本の棍棒を持っている。向かって左の夜叉は、青色、二眼で、髪の毛を逆立たせ、裸形で赤褌をはき、右手で鉞を持っている。また同窟の西壁龕外の南側にも夜叉（壁画）が描かれている。こちらは、赤色、三眼で、髪の毛を逆立たせ、裸形で短いパンツをはき、左手に鉞、右手に棍棒を持っている。

今回の調査では、敦煌の西千仏洞でも夜叉像（壁画）を実見することができた。西千仏洞の第一八窟の北壁の西側、東側にはそれぞれ一体の夜叉像が描かれている。どちらの夜叉も赤色の裸形、二眼で、褌をして棍棒を持っている。

さらに楡林窟においては、第一二窟の前室北壁に二体の夜叉像、東壁北側に五体の夜叉像、南壁に二体の夜叉像、東壁南側に五体の夜叉像（いずれも壁画、梵天・帝釈天に侍す）を実見することができた。また、同一三窟前室北壁、南壁にも夜叉像（いずれも壁画、梵天・帝釈天に侍す）を実見することができた。

## 楡林窟の魔衆たち

楡林窟の第三窟は密教の造形がずらりと並び、まことに壮観である。壁画は西夏の時代、彫刻は清代のものであるという。窟内の正面（東壁）には、中央に八塔変があり、降魔の場面が描かれている。また、向かって右には五十一面千手千眼観音変が描かれ、その内部に農耕、鉄の道具

の生産など民衆の生産風景が多数描き込まれている。さらに、向かって左には十一面千手観音変が描かれている。

八塔変には、降伏される魔衆たちが複数描かれており、降伏されて落下する魔や、鏡を見る魔女が描かれている。魔女は醜悪な顔、腹、胸をしており、自ら鏡でおのれの姿を見ている。中国にはマーラの語を訳す適切な言葉がなく、「魔」という文字が新たに造字されたというから、これらの宗教的概念さらに視覚イメージは文化交流の中で受容されたものと理解されるだろう。

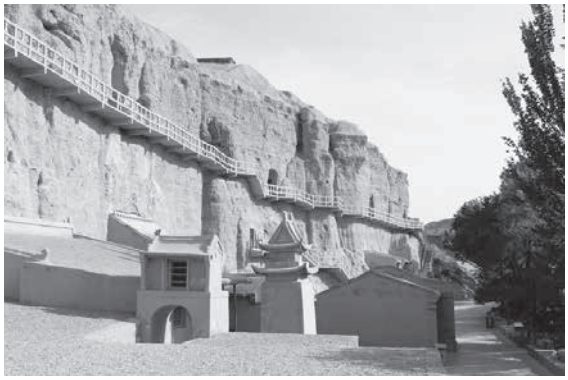

写真８　楡林窟

## 観無量寿経変相図

敦煌では多数の観無量寿経変相図を観察することができた。私は日本の当麻曼荼羅に関心があり、その源流となる中国の観経変に強い関心を持っている。今回、数多くの観経変の極楽浄土の造形、未生怨や十六観想の描き方、上品上生から下品下生に至る部分の描き方などを実見することができ、多くの知見を得ることができた。

観経変だけではない。敦煌では、法華経変、弥勒経変、薬師経変、金光明経変、金剛経変、維摩経変、報恩経変など、種々の変相図に接することができ、多くの知見と多くの課題を得ることができた。同行の諸氏とお世話になった中国の先生方に心より御礼申し上げる次第である。


［参考文献］

野口圭也・吉田一彦・上島享・増記隆介「例会要旨　密教の修法と造形――孔雀明王をめぐる政治・教理・説話・美術」『日本仏教綜合研究』一六、二〇一八年

森雅秀「エローラ第一一窟、第一二窟の菩薩群像」『金沢大学文学部論集　行動科学・哲学篇』二七、二〇〇七年

森雅秀『仏教の女神たち』春秋社、二〇一七年

橋村愛子「敦煌莫高窟及び安西楡林窟の孔雀明王（māhāmāyūrī）について」『美学美術史研究論集』二五、二〇一一年